

---

# 私の幸福をあなたに

usa

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

私の幸福をあなたに

### 【Nコード】

N6379Y

### 【作者名】

Usa

### 【あらすじ】

工藤新一 工藤蘭 共に二十歳

嬉しい知らせと共に、二人の間に事件が起きる。

『だって彼女、ウザいし？キャハッ』

一人の少女が蘭を追いつめていく。

新蘭。結婚している設定です。

## Happy 1

ここはとある洋風の屋敷。

一組の若い男女が、何やら話しあっていた。

「そんで、ホームズはな…」

「あーはいはい。そうですか」

瞳をキラキラとさせる青年と反対に、彼女はうんざり顔。

「もつと話しておくべきことあるでしょ」

「ん？あ、ああ…」

彼女が強い口調で言うと、彼の歯切れが悪くなる。

「でも、さすがに早いだろ…」

「だーめ！後回しにしたら、新一絶対はぐらかしちゃうから」

新一は苦り切った表情でコーヒーを飲む。

「そんな不味そうな顔したら捨てるわよ」

「じよ、冗談だって」

カップを取り上げようとする蘭の手を、新一は慌てて止める。

「お前は、いいから座ってるよ」

「…わかりました」

蘭はそう言って、ソファに腰を下ろす。

「にしても、アイツら遅すぎだろ…」

新一は時計を見つめた。

時刻は約束の時間を一五分過ぎ、一時四五分。

「しょうがないよ。来てっていきなり言った、私達が悪いのよ」

「そうそう」

「やっぱそうなのか…」

ん？

今、一人会話に紛れ込んでいなかったか？

「…黒羽。テメエ…」

「いーだろ、別に。鍵かけてなかったそっちがわりーんだからよ」

黒羽快斗は反省した様子もなく、ソファにひっくり返る。

「やめてよ、快斗！ここ、工藤君ちだよ」

青子は快斗を窘めつつ、自分もちゃっかり腰掛けている。

「不法侵入だぞ、全員」

「んな堅いこというなや、工藤。こっちは来てやったんやぞ」

服部平次は新一と肩を組み、黒い顔とは対照的な白い歯を見せる。

「せやけど、あたしらなんも言わんと、急に入ってしもたし…ごめん、蘭ちゃん」

和葉は申し訳なさそうに蘭に謝る。

「私達はいいのよ。無理言ってきてもらったんだし。今、お茶持ってくるから…」

「あ、オレが行くから、座ってるって！」

立ち上がりかけた蘭を再び座らせ、新一はキッチンへ向かう。

「なんやの、工藤君。今日はえらい優しいやん」

「そ、そう？」

和葉が不思議そうに言うと、蘭は曖昧に返す。

「こりゃ、何かあったな」

「何かって？」

ボソツとつぶやく快斗に青子はたずねたが、快斗は答えない。

「そんで、工藤。何でオレらのこと呼んだんや？」

「ん？ああ…」

新一は全員の前に飲み物を出すと、ひとつ咳払いをした。

「え、えーと、オレ達はもう二十歳で、皆それぞれ結婚した…だろ？そんで…まあ、その…」

どんどん歯切れが悪くなっていく新一。

蘭が急かすように小突いた。

もう一度咳払いをし、新一は言った。

「まあ…つまり、オレらにだな…」

再び言葉に詰まる。

すると、業を煮やした和葉が言った。

「苛々させんとして。男なら男らしく、はっきり言ったらどうなん  
？」

隣で青子が頷く。

「あ、あー…えーと…つまりそういうことだよ。ほら…」

「そんなんでわかるかい！」

「オレらは超能力者じゃねえぞ」

平次と快斗が突っ込みをいれる。

「いや…別に…その…」

「もういいわよ！私が言うから」

蘭がそう言つと、新一はようやく決心がついたようだ。

「ちょっとお前らに報告があつてよ」

蘭の肩を掴んで落ち着かせると、ゆっくりと言った。

「オレと蘭に…」





子供ができた」



本日も、工藤邸は賑やかです。

## Happy 1 (後書き)

こんにちは、usaです

新連載です！

駄文で時々意味不明ですが、どうぞよろしくお願いします。> |<

## Happy 2

新一からの衝撃の告白から数分。

ようやく客人四人は静かになりかけていた。

「ま、まあ、おかしくはあらへんもんね」

「うん。蘭ちゃん、おめでとう」

和葉と青子は真っ先に祝福の言葉を述べる。

しかし、平次と快斗は新一をからかう方で忙しいらしい。

二人はそろって新一を小突いていた。

「もう！子供なんだから」

「ほつとご。それより蘭ちゃん、お腹触ってもええ？」

「青子も！」

二人は蘭のお腹に耳をあてた。

「まだ早いよ。一ヶ月だもん」

「でもええなあ蘭ちゃん。もうお母さんになってまうんやね……」

和葉がしんみりと言った。

「お母さんか……うらやましいな」

と、青子も言った。

「二人だつてもうすぐだよ、きつと」

「そうかな…」

「うん」

そこで、チャイムの音がした。

「ちょっと出てくるな」

新一が玄関の方へ向かう。

その背中は少し誇らしげだった。

「工藤のヤツ、赤ん坊できたら性格変わりよつたな」

平次がぼそりと快斗に耳打ちした。

「そんなもんなのかねえ」

しかし、二人のだらけた会話もそれまでだった。

「ほら、さっさと運んで！」

「早くしなさいよ」

命令口調の声とともに、誰かが中に入ってきた。

「んなこと言つたつて、重てえんだよ…」

後ろからはよろよろと大きな荷物を運ぶ、新一の姿。

そして、そのまえには鈴木園子と宮野志保。

一同は啞然としてその光景を見ていた。

「そ、園子…何なのその荷物…」

蘭が口をパクパクさせながらたずねた。

新一は近くにその箱をおくと、ため息をついた。

「何って、お祝いよ！決まってるんじゃない」

園子はニヤニヤしながら、箱をあけた。

中にはシャンパンやらワインやらがふんだんに入っていた。

「久しぶりにみんな集まってることだし、パーっと盛り上がろう！」

「もちろん、おめでたの人はジューズよ」

すっかり親友になっていた志保も、蘭に微笑みかけた。

蘭も笑顔になり、礼を言った。

「ありがとう…」

「そうそう。これ、博士からのプレゼント」

志保は同じ箱から、何やら大きな機械を取り出す。

「な、何それ？」



青子が目を点にさせた。

「自動裁縫機つて聞いたわ。これから子供の服とか必要になるだろうからって。この中に布を入れればいいんですって…」

「ほ。そんなら試しに入れてみよか」

平次が面白半分に、自分のハンカチを入れた。

「やめた方が良かったと思うぜ…」  
と、新一は言った。

「何でや？」

だが、答えを聞くまでもなかった。

その機械から、作動音とは別の音が聞こえてきた。

そのうち音は大きくなっていき…

「おわっ!?!」

「きゃあっ!」

「…な?言つたる?」

爆発し、見るも無残な姿となる阿笠の発明品と平次のハンカチ。

その場にいた全員が呆然とする。

「と、とにかく、今日は蘭のおめでた祝いだし、皆で飲もう!」

園子が慌てて取り繕い、グラスを配りはじめる。

志保がそれに、シャンパンを注いでいった。

ただし、蘭はジュース。

和葉と青子も遠慮した。

「それじゃ、蘭と新一君の子供の、誕生を祝して…」

乾杯、という前に、再びチャイムが鳴った。

園子は上がっていた手を下げた。

「今度は誰やる？」

「またお祝いに来た人かな？」

和葉と青子がほのぼのと言った。

思えば、このチャイムが、すべての悪夢の始まりだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6379y/>

---

私の幸福をあなたに

2011年11月20日19時51分発行